中あわせだからである。

り)なる言葉は、長いあいだ嫌われものだった。

「矛盾」と背

「自己言及」(自己参照、自己準拠、自己指示……などとも言

快い興奮の渦を巻きおこしている。

学』(青土社)が、この問題に正面きって挑みかかり、

読者に

うな売れ行きを見せたが、今また、大澤真幸氏の『行為の代数 どる本だった。数年前、翻訳が店頭に並ぶとたちまち、飛ぶよ 自己言及をめぐる盛り沢山な話題を、メビウスの帯のようにた スタッターの『ゲーデル・エッシャー・バッハ』(白揚社)は、 華鏡のように、

眩暈を誘う魔力を秘めている。たとえば、ホフの**。 膝訶不思議な世界への入り口。きらびやかな万

自己言及は、

新

橋爪 大三郎 著

日険としての社会科学 7 * 20 时、四六判234页、1300円

毎日新聞社

探偵小説のように書かれた社会科学

沢

トゥギャザネス」をキイ

接することができれば、流感も投することができれば、流感もつつある政治へのある。高まりつつある政治へのある、この本にしても、それによってこの本に投することができれば、流感も 言かれねばならない 探偵小説は系譜学である。

れようと意識している社会科学

無駄ではない。

ひとのの優秀な探偵が解き明かいとのの優秀な探偵小説のようである。市民社会、憲法、マルクス主義、市民社会、憲法、マルクス主義、まるで探偵小説のようである。 してゆくのだ。 の木はほかにない。文体の極端 科学は探偵小説のように

かにする。

で同じ圏域に生じたものであ

ば憲法を作ったこともない国にスト教もなく市民革命もなけれ

るまでに、二十年の歳月を野 ーズが哲学書について口に

ヤ・キリスト教の問題系を共有 する関域においてしか生じ得な かったものである。支配者を支 様である。だがキリスト教の問配する法――憲法についても同 スト教の問題系と踵を接する形 題系そのものには市民や憲法の

> し、自己部拠の形式を確立する。
> やがて新たなる問題系は、自 間から、 体系を 満足する 超越者 するようになる。そしてこの瞬 ことによって自己を再編・更新

響を及ぼしていたことを示す。物が別の場所では違った風に影 系譜学は探偵小説のなすことを

れは何気ないきっかけからある

たとえば日本は西欧にも例が

要となり、あってもなくても構(神や王)の存在は原則的に不

民という言葉があり、憲法が存 利や平等を口にする。日本に市あって、人々は日常語として権

なことになってしまうのである。 り的に挿入されたまま現在に至っているのである。それゆえ市っているのである。それゆえ市民の権利と憲法とが奇妙に分離民の権利を確保するためし、水平の線分を確保するための手段が垂直の線分を可くようしている。

だが本当に日本は、超越的理

るのだ。しかもそれは天皇を共 おまけに近代の天皇制は、この の現実は、いかにも奇妙である。 停滞し続ける。

所に移動させる。ユダヤ・キリ を消飲から日本という奇妙な場 を消飲から日本という奇妙な場

日本に固有の特徴である。日本方法を持たない。これは事ら、志に関する概念を洗練させるない。これは事ら、ない優秀な憲法を持ちながら、ない優秀な憲法を持ちながら、

て超越的存在に準拠する問題系って構成されている。したがって構成されている。したがっぱが深く、超越的存在と関係する

から別の問題系を離脱させる経

に対する障害を表している。 優越」概念である。前者は日本クス主義と「トゥギャザネスの に橋爪氏が持ち出すのは、マルか? この問いを検索するため ここまで来てしまったのだろう における超越的理念との初めて 秩序を形成する。つまりトゥギ奇妙な均一性に貫かれた多層的同体の中心に配分することで、 来から伝わる日本人の心性など この「トゥギャザネス」を、古る。橋爪氏の最もすぐれた点は 体の活性状態のことなのであ ャザネスの優越とは、天皇共同

充実には「トゥギャザネス」と直接の原因となった資本主義のいせいで沈滞してゆくが、その がたちは僧侶・伝道師であっかたちは僧侶・伝道師であり、野しい数のイデオローがあり得た。共産党は教会が思り、野しい数のイデオローがたちは僧侶・伝道師であり、野しい数のイデオローがたちは僧侶・伝道師であっ ギャザネスが意に反して資本主 いう日本固有の背景があった。 ルクス主義の運動を回顧的に 頃は、経験に照らして、戦後マ現場を自分の足で検証した探 た。結局、この運動は資本主 近代に最も逆らうはずのと 直しを迫られている。この危機 も、新たな時代の前に、その基 も、新たな時代の前に、その基 をどうするか? 大喰らいの化け物さながらであ 定若してしまう様は、雑食性で らが少しずつ位相を変えながら である。民主主義、憲法、これ 権力機構は、基本的な配置が崩 提起していることである。この された権力のトポロジーとしてと考えずに、非常に周到に運用 何でも挿入可能

実り多い。来るべき「記号空間新たなるボジティヴィズムは までの系譜を自分の目で追って で自分の手に取って読まれるべ 本書があくま

論」が今から楽しみだ。

麗

橋爪大三郎

る場合。

ととにも、

真偽を不決定にするループができあがって

書いてあるのは嘘』、『表に書いてあるのは本当』、と書いてあ

くっている。も少し複雑な例では、

一枚の紙の両面に、″裏に

似たようなルー

プをつ

スペンサー=ブラウン

大澤理論の導きによる

いる。

パポスター

貼るな、というポスターも、

おかしい。真偽が不决定な、自己言及のループができあがって

クレタ人が嘘つきであると考えても、

嘘つきでないと考えても

ているのだが、この発言を、この発言自身に適用してみると、 れはその昔、クレタ人であるエピメニデスが言ったことになっ

"クレタ人は嘘つきである" のパラドックスを思いだそう。

ح

自己指示形式の壮麗な宮殿









ことになるからだった。 論も、こういう作戦だった。ラッセルがヘーゲル流の弁証法を ループは、システムから放逐してしまおう。ラッセルの階型理 攻撃したのも、システムのなかに矛盾(=非論理)を持ちこむ にならなくなってしまう。そこで、自己言及のような怪しげな 一箇所に矛盾が現れただけでも、全体が汚染されて、使いもの 論理学や数字のような、形式化されたシステムでは、 たとえ

またがぜん注目を集めている。 り、ヴァレラやルーマンもこの書を参照に掲げるにおよんで、 れかけたが、オートポイエーシス(自己生成)がブームとな (朝日出版社)が、それである。との仕事は、いったん忘れら 自己言及の問題を、 ところが、ラッセル晩年の弟子、スペンサー=ブラウンは、 劇的なかたちで再発掘した。『形式の法則』

大澤真幸=著「行為の代数学」(青土社)

『行為の代数学』はこの、『形式の法則』についての解題であ

テーマに、新しい角度から大胆な接近をはかっている。 る今田高俊氏の仕事などが、評判をよんでいる(『自己組織性』 ルの立場から、社会のリフレクシヴ(自己反省)モデルを唱え ホットなテーマとなっている。たとえば、アンチ・コントロー ・創文社)。『行為の代数学』は、解題のかたちをかりて、この 社会学や社会システム論の分野では、最近、「自己組織」が

日、いつになく嬉しかった。 ところで『行為の代数学』は、よい本である。手にとって数

を自分でも考えたくなる)なら申し分ない。『行為の代数学』 (ほかの本には絶対書いてないことが書いてある)なことだと その本だけでいちおり完結した世界になっている)、②独創的 「よい本」の条件は、①自己包括的(ほかの本を見ないでも、 この三拍子がそろっているから、じつに「よい本」なの しかも、③刺戟的(発想が洞察にあふれていて、その先

たフォーマルな書物だが、そのフォーマルでない含意(数式か ラウンにかとつけて、自分の言いたいことを、かまわずどんど ら汲みとるべき部分)を、十二分にひきだしているあたり、 ん言っているところだ。『形式の法則』は、かなりかっちりし とくによい点は、原著の解説にとどまらず、スペンサー=ブ

的確である)。 並々でない(もちろん、フォーマルな部分の紹介も、きわめて

ンサー=ブラウンの仕事がどんなものか、ひと通り押さえてお そこで、『行為の代数学』を批評するに先立ち、まず、スペ

論理学と代数学

神に、相通ずるものがある。 二人ともラッセル門下の才人である。そしてなにより、 理哲学論考』)と似ているなあ、と思うだろう。時代とそ違え、 っている人ならだれでも、ヴィトゲンシュタイン(の特に『論 スペンサー=ブラウンの『形式の法則』の頁をめくれば、知

ベンサー=ブラウンの仕事の特徴を理解するのが早道だと思 ろ仕事をしたので、ここでもとりあえず彼を補助線にして、ス 私は、ヴィトゲンシュタインをだしにして、これまでいろい

は論理学だが、スペンサー=ブラウンの仕事は代数学である、と、こう言えそうだ。(前期の) ヴィトゲンシュタインの仕事 で、二人はじゃあどこがいちばん違うのか、と考えてみる

くその外に完結したひとつの世界があると前提する。そのうえ 自己指示形式の壮麗な宮殿 論理学は、リアル・ワールドなり、数字の体系なり、とにか

> ることを意味する。これが、ヴィトゲンシュタインの言う論理 は、使っている記号が、その世界の構造をちょうど反映してい で、その世界を、正しく記述することを考える。「正しく」と

なったりする。 るしかない。その場合にかぎって、それがたとえば、社会学に を与えるには、それをまるごと、リアル・ワールドと読み換え た世界である。この世界は抽象的なものなので、具体的な内容 これに対して、代数学には、外などない。それ自体が完結し

り立っている。 『行為の代数学』も、このような読み換え(解釈)によって成

との違いは、二人の書物のあり方にも反映している。

が違うが、それでも、との世界を前提にしている点は変わりな 型写像」である。(後期のヴィトゲンシュタインは、多少様子 を前提にして考える。それゆえこの書物のキーワードは、「同 ある。どうしてこの世界のことを考えられるのかを、この世界 が生きているこの世界(リアル・ワールド)についての書物でヴィトゲンシュタインの『論理哲学論考』は、われわれ誰も い。『哲学探究』はそのままで、世界を示す書物になってい

の根源的な分割(=判断)から始まる。それ自身が全体である いっぽう、スペンサー=ブラウンの『形式の法則』は、宇宙

try」)である。 存在しなくてかまわない。だから、この書物のキーワードは、 自己言及(スペンサー ととを、求めてやまない書物である。その外側に、何の世界も =ブラウンの用語では、「再参入 re-en-

は、aでないものではない。こう主張することで、ある種の理解 は、リアル・ワールドについて何も述べない同語反復に、まっ (世界のあり方に関する洞察)が生まれる可能性がある、と言 たく価値を認めなかった。 対しても、二人の態度は異なっている。ヴィトゲンシュタイン もとが違っているので、たとえば同語反復(トート aの二重否定は、 とのように、書物と世界の関係をどう考えるか、構想のおお 必ずしももとのaと同じでない、と言う。 しかし、スペンサー=ブラウンは、 ロジー) に

もっと重要なのは、矛盾や無限についての態度の違いだろ つぎに、この点を考えてみる。

有限主義·対·弁証法

経験できるのは、有限の出来事である。無限については、思い い。ここから彼は、厳密有限主義という立場に進んだ。人間が ょうどそれと対応する、有限な記号列で表わせないといけな る。彼によれば、世界は、出来事の集まりである。思考は、ち という考え方から出発した。論理実証主義に共通の発想であ ヴィトゲンシュタインはもともと、記号は世界を写像する、

悩まなくていい、と言うのだ。

きり必要としなかった。 た。だからラッセルの階型理論のような、矛盾の解消法をまる わけだが、彼はそんなことを、はなから思考可能でないとし ラッセルや一般の論者と同じである。けれどもそれは、厳密に 有限な範囲のことだ。無限集合では、e=e+ 1 だったりする ヴィトゲンシュタインも、矛盾を否定的なものと見る点は、

似ている。 いっぽう、スペンサー=ブラウンの記号観は、ソシュールと

囲い)だ。指示作用は、この内部で確定する。 (どんな囲いの外側にも必ずあると考えられる、目に見えない を見つけられない。それを象徴するのが、「書かれざる囲い」 は、どんな実体もないのだから、クロスは自分自身にしか根拠 区別が生じ、その区別が指示作用の根拠となる。これはソシュ ールの、シーニュ(記号)の理論とそっくりだ。区別以前に クロス(囲い)から、すべてが始まる。何もないところに、

その先『形式の法則』は、こんなふうに展開する。

の集まりである。 の意味を確定する。ゆえに世界は、無限の規模を持ったクロスどんなクロスも、もっと大きなクロスに囲まれることで、そ

ずる。(これは本質的に、ε=ε+1と同じかたちをしてい ここから、自己指示形式 (再参入) について考える必要が生

ない)と理解できるので、自己指示形式では肯定と否定が等し いことになってしまい、真偽価が確定しなくなるからだ。 る)。するとただちに、矛盾が生じる。クロスは、否定(~で

盾あるがゆえに、世界には時間も空間もあり、 かに位置づけるやり方は、ヘーゲルの弁証法にそっくりだ。 この矛盾を「非問題化」するために、"時間"が始まる。矛 とんなふらに、矛盾をしりぞけないで、積極的に世界のな 生成もある…

= ブラウンの、「指し示しの算法」は、形式化さ

外な方向に展開していく。大澤氏は、もうひとまわり大胆に、 れた代数学でありながら、矛盾をとりこんで、こんなふらに意 これを社会理論に読み換える。 まず、クロスを「行為」と読み換える。なぜなら、行為は有 読み換えのポイントを、順に押さえていくと

意味であって、そのつど世界の何ごとかを指し示すからであ

あらしめるものだ。無限も他者も、その意味でここにある。る。同様に、他者も決して現前しないのに、個々の行為を意味 はけっして現前しないのに、個々の指示を意味あらしめてい とだと思えば、まあ当たらずといえども遠からずだろう。 み換える。この概念はなかなか理解しにくいが、「他者」 つぎに、無限の規模をもったクロスを「第三者の審級」と読 無限 のと

無限も他者の存在も、矛盾である。そとから時間や振動が生

らだ。 る。内部と外部の反転を可能にするメカニズムを宿しているか まれたが、これを、贈与ないしコミュニケーションと読み換え

って、複雑な社会へむけてのダイナミズムを記述できるよう 重層を、こんどは、権力や制度の重層と読み換える。それによ む。世界は、それが重層することで、複雑になっている。との 自己指示は、このように、矛盾の生成と解消のドラマを生

要所で、奥行きのある社会学的含意を示して見せる。そんなふ うに、この体系をたくみに自分の議論に書き換えていくのだ**。** とらやって、スペンサー=ブラウンの体系に潜りこみ、要所

あまりに楽天的な…??

範囲では、こんなことが言えるはずだ。 を見てみないとわからない。『行為の代数学』からうかがえる 大澤理論の全貌は、近著『身体の比較社会学』(勁草書房)

ままだと、全然社会学でない。 ている。言いかえると、スペンサー=ブラウンの体系は、その 大澤理論とスペンサー=ブラウンとは、解釈によって結ばれ

をふくらませているわけだが、これは解釈の余地もなく、 とえば後期のヴィトゲンシュタインは、言語ゲームのアイデア これは、ヴィトゲンシュタインの場合と対照的だと思う。た それ

109

と、そのまま社会を論ずることになる。自体が、人間の社会活動のことである。言語ゲームを論ずる

こがひと味ちがうのだろう。りに限らない。別な解釈も可能なはずだ。では、大澤理論はど釈を通じてである。解釈は本来、多義的なものなので、ひと通スペンサー=ブラウンが社会理論になるのは、読み換えと解

*

『行為の代数学』の生まれるきっかけになった。『形式の法則』に、これだと思った。その運命的な出会いが、田宗介の存立構造論を滋養分としている。その彼がたまたま、会学的直観によって着想されたものだ。広松渉の現象学説や見会学的直観によって着想されたものだ。広松渉の現象学説や見

合、それも一緒にかかえとむかたちになる。だが、なにかスペンサー=ブラウンの側に問題点があった場ところがあるようだ。だから、その読み換えに説得性があるの大澤理論はもともと、スペンサー=ブラウンの体系と同型な

そんな問題点として、こういうことが考えられよう。

*

か、という疑問。 第一に、指し示しの算法がどんな空間で定義されているの

立し、区別はそのあとやってくる。これはソシュールが描いたるもの、の区別が最初にあったりしない、指示作用がさきに成スペンサー=ブラウンの世界では、意味するもの/意味され

を、『行為の代数学』、すなわち社会学に変換した。囲い)を、行為と読み換えた。そうやって、指し示しの算法記号の特性だ。『行為の代数学』は、この指示作用(クロス/

学としては問題だ。

で、けれども、この二つをそもそも区別しないとしたら、社会問を、社会と読み換える関係上、このような両義性は避けがたとい。けれども、ともとれる。代数学が成立するのっぺりした空圏域(=社会)ともとれる。代数学が成立するのっぺりした空圏域(=社会)ともとれる。代数学が成立する最大のの域りに解釈できる。世界は、一切の意味作用が生成していく現のの読み換えでは、指し示しの算法の展開する世界が、ふたこの読み換えでは、指し示しの算法の展開する世界が、ふた

のため、他者の位置づけの収まりがわるい。れずに言うと、彼の議論は、主観主義的に構成されている。そ大澤理論の楽天的な前提を反映するのかもしれない。誤解を恐もしかすると、これは、個人(身体)と社会を同型と見る、

*

第二に、無限のとり扱いについて。

工夫のおかげである。

工夫のおかげである。

「……(以下同様)」のような、特定できない記号のかたちで、理解、されるのがせいぜいだ。ところがスペンサー=ブラウンは、無限にひとつの記号を与え、指し示しの算法を無限のうで理解、されるのがせいぜいだ。ところがスペンサー=ブラウンは、無限は本来、有限の時間・空間のうちに現前しないはずで、無限は本来、有限の時間・空間のうちに現前しないはずで、

他者も定義上、との時間・空間のなかには現前しない。経験

ずだ。大澤理論は、そのように世界を描きだす。れどもそれは、この世界の成り立ちの根幹にそなわっているは代数学』が、無限を他者の象徴と見るのは、もっともだ。無限できるのはせいぜい、他者の徴候にすぎない。だから『行為の

問は根本的だが、なお検討を要す)。そも無理があったのではないかと、という疑惑もわく。この疑サー=ブラウン代数の空間を『社会』と解釈することに、そも(よく考えるとみると、クロスを『行為』と解釈し、スペン

*

分かれてくる、と考えたほうがすっきりするはずだ。
し、ないし行為)が先行し、時間(波動、ないし記憶)が後続し、ないし行為)が先行し、時間(波動、ないし記憶)が後続して、時間が唐突に、途中から導入されるのか。空間(指し示第三に、もっと素朴な疑問。スペンサー=ブラウンではどう

3

ない。すべて指し示しや行為が、自己言及をまねきよせるのな、第四に、大澤理論と自己言及のループとの関係がよくわから

いるはずだ。それにどう対処するのか知りたかった。ら、社会を描き出す大澤理論もやっぱり、自己言及に絡まれて

よう。……などなど。と、問題の種は残るが、それは楽しい宿題に

*

にちがいない。 代後半を代表する社会理論の一冊として、ながく読みつがれるを、社会理論のど真ん中にすえたことである。本書は、八〇年を、社会理論のど真ん中にすえたことである。本書は、八〇年『行為の代数学』の最大の功績は、自己言及に形式的な表現を『行為の代数学』の最大の功績は、自己言及に形式的な表現を

(はしづめだいさぶろう・社会学) 米 "An Amazing Labyrinth Named Self-Reference: The World of Spencer-Brown guided by Masachi Osawa", by Hasiiizume Daisaburo 1989 March